
空色のリセリア

嘉月 幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空色のリセリア

【Nコード】

N0272BA

【作者名】

嘉月 幸

【あらすじ】

《鳥籠の地》と呼ばれる、外界と隔絶されたレーレヘイト大陸。その地で帝国軍の操縦士を務める《空帝》ことヒューイは、嵐の日、リセリアと名乗る身元不明の少女を助ける。その少女を一時的に保護・監視することになったが、まるで浮世離れたような雰囲気において、彼女に不審なところは見られない。

しかしある日、ヒューイの目の前に現れた敵国操縦士アルクスが『リセリアを渡せ』という要求を突きつける。リセリアは一体何者なのか？

小さな籠の中、空を求め続けた飛行機乗りたちの物語。

序章 暴風

空を愛し、空に愛されし者よ

カライロ
空色の呼び声に応えし時

蒼穹の頂きにて相見え

おいて
追風に舞う強き翼を以て

鳥籠は開かれん

その言葉は、いつの頃からか空を翔ける者たちの間で語り継がれてきた。

閉ざされた海、閉ざされた空。

閉鎖されたこの大陸の飛行機乗りたちは、その言葉を胸に果て無き空を目指し、小さき空を飛び続ける。

この大陸に飛行技術が誕生してから、数百年。
この大地
未だ《鳥籠の地》を飛び出した鳥は、飛行機乗り一人としていない。

* * *

酷い嵐だった。

十数分前まで頭上一面に至高の空色が広がり、今日の空は澄んでいるな、などと考える暇すらあったというのに、今となってはそんな余裕は欠片もなかった。

空には真つ黒な積乱雲が覆いかぶさり、周囲は真昼だというのに夜中のように暗い。その上、ゴーストに容赦なく叩きつける巨大な雨粒が視界を遮る。

まるで子供が、突然大泣きし始めたような そんな嵐の中を、ヒューイは単機飛び続けていた。

『トライ4！ 応答しろ！ …… ヒューー！』

「……聞こえてる」

縦横無尽に吹き荒れる風に機体を奪われてしまいそうになりながらも、左耳につけたヘッドセットから聞こえる部隊長の怒鳴り声に小さく呟き返す。

『聞こえているなら隊列に戻れ！ 勝手に部隊を離れるとは何事だ！ 現状が分かっているのか！』

部隊長の半ばやけくそ気味の言葉が、どこか遠くに聞こえる。分かっている、とヒューイは胸中で呟き返す。

国境線となる山脈付近で、常駐部隊とは異なる敵国の戦闘機部隊を発見したとの報告を軍本部が受けたのが、およそ一時間前。ヒューイの属する空戦部隊には即刻出撃命令が下され、一部隊は報告のあった地域を目指して飛び立った。

そして現在飛んでいるのが、その問題の戦争最前線空域。まだこの周辺には敵機が潜んでいる可能性が高い。いつ戦闘状態に突入してもおかしくない状況だった。

今すぐ隊列に戻り、任務を続行しなくてはいけない。そう頭では理解していても、ヒューイは独り飛ぶことを止められないでいた。

「悪い……ちょっと戻れない」

ポツリと零すヒューイの眼前には、天を突くような山が聳え立っていた。国境線となるツスタン山脈。その山並の中でも最も標高の高い、天空へ続くともいわれている箇所だ。

「呼んでる……声が。呼び声が聞こえるんだ」

『はあっ！？ 訳分からんこと言ってるじゃないでっ……と戻れ！』

後半、部隊長の声に僅かな雑音が混じる。さすがの豪雨に電波が影響を受けているのか。それとも、自分が部隊から離れすぎているのか。そんな考えが脳裏をよぎった直後、

『ヒューイ！ ヒューイ……！』

ザ、ザザツという強い雑音を最後に交信が途絶えた。それ以降は雑音しか聞こえず、ヒューイは乱雑な動作で無線機のスイッチをオフにした。

風に逆らわず、大気の流れに翼を乗せてゆるりと右に旋回する。

天候は悪化の一途を辿っていた。いつの間にか強い雨風に加えて、獣が唸るような低い雷鳴まで聞こえている。何度か暗雲が光を放し、とうとう稲光が空に走った、その一瞬。

雷光に照らされて山肌に何か白い、小さな物体が浮かび上がった。視界にその白い影が入ったのは、空が一際強く光ったコンマ数秒。しかし、ヒューイはそれを見逃さなかった。

とつさに機体を傾け、暗闇の中地上に視線を凝らす。

シルエットは非常に小さい。ヒューイの飛行高度から距離はざっと見積もって百数十メートルしかないというのに、米粒のように小さく見える。大きさと先ほど見た色からして、少なくとも血の赤色の敵国軍機ではないことは明らかだった。

スツと機体の推進力を落として、徐々に高度を落として接近していく。

そして、ようやく何があるのかと確認できるまで近づき 目を見張った。

「なっ……」

シルエットが小さくて当たり前だった。眼下に見える荒れた山肌の斜面。最悪な視界に移ったのは、力なく倒れる一人の人間の姿だった。

なんでこんな所に人が。そんな疑問が当然のように湧いてきた。

この地域は国境線 つまりは、戦闘の最前防衛線にあたる。それ以前にここは山の中腹にも達していないとはいえ、ゆうに標高一千メートルを超えている。更に、この山は降りても最寄りの街までは相当の距離がある。そう易々と足を踏み入れられる場所ではない。ぐるぐると脳内を回り始めた思考を、頭を振って振り払う。

ここがどこであろうと、倒れている人間を放置しておくわけにはいかなかった。

周囲を見渡し、比較的平坦な場所に機体を無理矢理止め、エンジンは切らずに低出力を維持して車輪ブレーキをかけておく。いつでも離陸可能な状態にして、ヒューイは操縦席を飛び出した。

山肌にはあちらこちらに大小様々な岩が転がっていた。足場の悪さと時折吹き付ける突風に足を掬われそうになりながら、全速力で駆ける。そうしてようやく、人影がはつきりと見え、

「おい、大丈夫……！」

そう言い掛けて、思わず息を呑んだ。

少女、だった。

まだ若い。十代半ばと思われる少女が身に着けているものは、純白の薄手のワンピース一枚だけだった。そのスカートの裾から覗く靴すらも履いていない素足も、地面に投げ出された両腕も日の光を浴びていないように白く、細い。

目を引いたのはそれだけではなかった。

濡れた地面に広がるのは、腰までありそうなほどに長い、淡いブルンドヘア。この大陸には存在しない髪の色だった。大陸の外外界にはそういう容姿をもった人間が存在するといわれているが、ヒューイ自身見るのは初めてだった。

この雨で全身が泥に汚れてしまっているが、その煌髪と白い肌は、暗雲の下であってもなお光を放っているようだった。

あまりにも細く、華奢で 触れれば手折ってしまいそうな、そんな儚く清廉な少女の姿に、ヒューイは呼吸すらも忘れてその場に立ち尽くしていた。だが、

「あ……」

降りしきる雨音に混じって聞こえた少女の微かな呻き声に、はつと我に返る。

慌てて駆け寄り、少女を抱き起こす。その身体は、見た目から想像した以上に軽かった。

雨で張り付いた髪ごと力任せにゴーグルを額の上に押し上げ、少女の顔を覗き込む。顔にかかっていた少女の前髪を払うと、人形のように端正な顔立ちが顕わになる。

「大丈夫か、しっかりしろ！」

「助け……」

「大丈夫だ！ 俺が助ける。だからしつかり……！」
残る力を振り絞って伸ばされた少女の手を掴み声を荒げるものの、
返答はそれ以降ない。

よく見れば、身体に付着しているのは泥だけではなかった。まるで崖から滑落したかのように、剥き出しの肌のいたるところに無数の擦過傷がある。傷の程度は深くないが、そこから流れ出た血が泥に混じって白い肌を汚していた。

操縦用のグローブを外して、軽く頬を叩く。それでも返答はなく、触れた陶磁器のような肌は長い間雨に打たれていたのか、それこそ人形のように冷え切っていた。

雨に濡れてしまっただけではないよりもマシ、とフライトジャケットを脱いで少女の肩にかけ、両腕にぐっと力を込める。ヒューイはその華奢な身体を持ち上げると、一目散に機体へと走った。

この子がどういう経緯でこのような状態に陥っているのは分からないが、ひとまず基地に連れ帰って手当てしなくてはならない。このままの状態が長く続けば最悪、少女の命に関わることになるかもしれない。

蒼穹色の機体まであと数歩となった、その時。

ごうつと風を切る音とレシプロ機特有のエンジン音を響かせて、頭上を一機の戦闘機が通過していった。反射的に見上げた機体の色は、暗闇に紛れるような暗色のレッド赤。

雨音で接近する音に気付かなかったのか、少女のことに気を取られすぎていたのか。内心自分を叱咤しつつ、少女を腕の中に硬く閉じ込めて、ヒューイは岩陰に身を隠した。

悪天候が幸いしたのか、こちらの姿にも機体にも気付かなかったよう、敵機はそのまま上空を通り過ぎていった。

少女を再び抱え上げ、操縦席に収まる。少女が小柄なおかげで、彼女を膝の上に乗せた状態でも何とか操縦できそうだった。

敵機が戻ってこないうちに、この空域を離脱しなければいけない。そのため猶予は、あまりなかった。

（嵐の終わり、か）

突発的に発生する積乱雲は、嵐をもたらずが大抵は短時間で収まる。

ふと南の空　自国の拠点がある地域　を見れば、積乱雲の切れ目は直ぐそこまで迫っていた。それにあわせて徐々に雨足は弱くなり、空には明るさが戻ってきている。

これなら本来一人用であるこの機体でも、それなりの安全性を持つて飛べるだろう。だが、同じく敵機の機動性も、こちらの捕捉されやすさも格段に上がる。おそらく、次は確実に見つかる。

先程の無理な着陸でエンジンに異常をきたしていないか確認しつつ、ヒューイは離陸のタイミングを図る。

離陸のことを考えずに着陸したせいで、機体の進行方向には離陸速度に達するために必要な滑走距離の半分もない。その先は　断崖絶壁といっても過言ではない急斜面になっている。最善の離陸法は、崖から飛び出し、山肌を撫でるように吹き上げる風に乗る方法だろう。

無骨なゴーグルを、下ろす。額の上から、目元へ。

スロットルレバーを最大まで押し込もうとし　視界の左端に、高速で接近する機影を捉えた。つい数分前に頭上を通り過ぎた敵機が、左後方からヒューイの乗る戦闘機に向かって一直線に飛来する。機体前頭部に取り付けられている機銃は、間違いなくピタリとこの機体に照準されているだろう。

背筋を這い上がる、悪寒。

ヒューイは全力でレバーを押し込んだ。エンジンが全開になると同時に、ブレーキを解除。

機体が滑るように動き出した直後、暴風のような弾丸の嵐が右主翼の後ろに降り注いだ。

「くっ……」

間一髪避け　というわけにはいかなかった。直撃は回避したものの、いくつか補助翼とフラップを掠めていく。いずれも機体に

致命的なダメージを与えるものではない。だが、

「つつっ」

右前頭から雨に混じって垂れた真つ赤な液体を右腕で無造作に拭く。その右腕からも鋭い痛みが走った。

二発。避け切れなかった弾の一発が頭を浅く、もう一発が右肩を抉るように掠めていた。

敵機は速度を落とさずヒューイの上空を通り過ぎる。恐らくは旋回して、今度はヒューイの正面に回りこむつもりだろう。

しかし、それよりもヒューイが崖から飛び立つほうが早かった。

途端吹き上げてくる強い上昇気流が翼を持ち上げた。一気に敵機よりも上空へ舞い上がる。こうなれば、再度上を取らない限り敵機はそうそう手を出せない。

無論、ヒューイがそれを許すはずがない。

敵機が機首を転換するよりも早く、速度を上げ、追い風に乗るようにして離脱進路をとる。気流を利用してしまえば、こちらの機体の方が軽い分速度が出る。油断しなければ、振り切れる。

「だ、れ……？」

離陸の際に意識を取り戻したのか、少女がうつすらと開いた瞳でヒューイを見上げる。しかし、その消え入りそうな声に直ぐ応えることは出来なかった。

頭部の傷が思ったよりも酷いのか、ゴーグルの隙間から流れ込んでくる血が右目の視界を赤く染めていた。操縦桿を握る右腕の付け根からは断続的に痛みが走り、力を込められない。後方から追ってくる敵機もあり、とても応えていられる状態ではなかった。

だが ヒューイの口はまるで他者に操られているように、滑らかに動き出した。

「ヒューイ」

凜とした、張りのある声で。

「メテオール帝国軍第三遊撃隊所属、ヒューイ・ノルグス」

その名乗りに応える声はない。再び意識を失ったのか、それを確

認する余裕すら今のヒューイにはなかった。けれど

ヒューイ、と。腕の中で少女が呼んだような気がした。

第一章 籠の中の鳥

通り過ぎる雷雲の下にいるようだった。

響く音は大きくなったり小さくなったりと、どこか乱暴な音楽を奏でているかのようにも聞こえる。

確か、先日の飛行中に遭遇した嵐の雷鳴もこんな感じだったかな。今この場所に呼び出されている原因を思い起こし、ふと目だけを動かして窓の外を見やる。

空は、鮮やかな青色だった。遠くには雲の波も見える。

嵐の気配など欠片もない、いい天気だった。

（あー飛びてえ……）

強い風に乗って飛ぶのも面白いのだが、やはり今日のような穏やかな空の下でのんびり、というのが一番いい。

なによりもう四日も飛行機に乗るところか触れてもいない。空が恋しくて仕方なかった。

真正面から飛んでくる部隊長の怒声はどこ吹く風。そんな様子のヒューイに気付いたのか、椅子に腰掛ける部隊長カルダ・ダグラス少佐の片眉がピクリと跳ね上がった。

とうとう雷直撃か。そんな予想が一瞬よぎる、が。

「……そもそもお前には戦闘機乗り……いや軍人としての自覚が欠けてるんだ。もう少しは」

彼の性分では今ここで能書きも建前も全て捨てて、ヒューイに掴み掛かりたいところなのだろうが、さすがはメテオール帝国軍最年少少佐昇進記録保持者。こらえた。

広々とした光沢のあるデスクの上に広げられている、ヒューイが過去提出した始末書の数々を捲り、カルダは言葉を続ける。だが、

「ふああゝあ」

「……ノルグス少尉。聞いているのか」

「聞いております。ダグラス少佐殿」

思わず欠伸の出してしまった口を押さえながら返した、テンプレ―ト典型的な生返事に。

ブチィ、と。カルダの脳内で何かが断ち切られる音を聞いた気がした。

腰掛けていた椅子を豪快に後ろに倒し、カルダは両手で力の限りにデスクを叩く。

「どこが……聞いてるっていうんだ、この軍紀破り常習犯！ いつも任務に出る度隊列崩して、戦況乱して お前が軍紀違反するたびに上官の俺まで咎められるんだからな！」

（怒ってる原因、ぜってーそれだろ）

思わず本音が零れてしまったカルダに、内心突っ込みを入れてヒューイは睨み返す。

「あーうつさいな！。分かってるよ独断行動をしたのがいけないんだろ。以後、十二分に気を付けます。はいこれでいいだろ！」

やけくそ気味にそう言い放ち、ヒューイは目の前の上官兼友人を睨み付けた。

メテオール帝国軍カルダ・ダグラス少佐。ヒューイの軍学校時代からの友人で、つい先日、ヒューイの一つ上 二十二歳で軍少佐に昇格した飛行機乗りだ。現在彼は、ヒューイの所属する遊撃隊の隊長を務めている。

一応カルダは上官、態度には気を付けなければいけない。常々そう思っているのだが、どうしても昔からの癖は抜けない。それはカルダも同じのようで、お互い、時に上官と部下という立場を忘れて言葉をぶつけてしまう。

なにより呼び出されてからかれこれ三十分近く、ヒューイは直立不動の体勢でカルダの話を聞かされているのだ。そろそろ我慢の限界だった。

反省の色が見えないヒューイに、カルダの黒曜石の瞳に灯っていた炎が苛烈さを増す。

「それが分かかってないっていうんだ！」

伸ばされたカルダの手が、迷わずヒューイの軍服の襟元を掴む。
まだ直りきっていない右肩の傷が、鋭い痛みを発する。

「いつてえ！ 病み上がりなんだから加減しろよ！」

「嘘言え！ 病み上がりつていつたつてただの風邪で寝込んでただけだろうが！ 命令違反の報いだ報い！」

そうカルダが、ヒューイをぐつと力任せに引き寄せる。ヒューイも反射的にカルダの首に絞められたネクタイに手をかける。その時、
「あんた達うるさい」

氷の刃のように鋭い一言が、二人の間に漂う空気を切り裂いた。

ヒューイは反射的にカルダの執務室の入口に目を向ける。そこには、木製の豪華な扉に手をかけ、眼鏡の奥から冷めた視線を投げてくる一人の女性の姿があった。

身を包む、タイトな軍服。ロングスカートの裾からは光沢のある黒のブーツが覗き、首元には同色のネクタイが締められている。結い上げられた髪と、細めの眼鏡が凛々しい印象を強めていた。

「カルダもヒューイも、声、廊下まで聞こえてるわよ」

彼女 ルベリエ・クリソベルの呆れた声に、二人ははっとして手を離す。

そんなヒューイとカルダを交互に見比べて、ルベリエは深々と溜息を吐いた。

「ほんつともう……二人とも子供じゃないんだから」

「すみません……」

異口同音に謝罪の言葉を唱え、視線を落とす。まるで母親に怒られている少年のような二人の姿に、ルベリエの視線の温度が一段階下がるのを感じた。

ルベリエは、今は別の部署に異動してしまったが、一年前、任務中の事故が起こるまでは同じ部隊で翼を並べていた仲間である。

軍内の階級ではカルダの方が上なのだが、多少の年齢差のせいもあるのか、どうしてもルベリエだけにはカルダも頭が上がらないのだ。

「そんな大声出していると、この子が怖がるでしょう」

そう言ってルベリエはすっと、身体を横に一步滑らせる。長身のルベリエの後ろ　そこに、見覚えのある少女が佇んでいた。

室内でも日の光のように輝くブロンドヘアと、白磁のような手足。純白の薄手のワンピースを纏う、線の細い身体。

忘れるはずがない。あの嵐の中で見た、記憶に強く焼きついて離れることのない少女がそこにいた。

「君は……」

呆然とヒューイは呟く。しかし、それに続く言葉が何故だか出てこなかった。

少女は何かを伺うようにルベリエを仰ぎ見る。それに対し、ルベリエは柔らかな笑みを投げかけると、少女は笑顔で小さく頷き返した。

まるで、野に咲くシロツメクサが花開くような笑みだった。

少女は少し躊躇いがちに、けれど軽い足取りでヒューイに歩み寄ってくる。ふわりふわりと腰まであるブロンドが宙に舞い

「!？」

抱きつかれた。

眼前で止まるかと思いきや、少女は最後の一步を強く蹴ってヒューイに飛びついた。

予想もしなかった出来事に、ヒューイは身体を硬直させた。何をされているのか一瞬理解できず、抱きつかれた勢いそのままにふらつくが、危ういところで少女の身体をしっかりと抱きとめる。

それから腕の中の少女を見ると　彼女は幸せそうな笑みを浮かべてでヒューイの胸に顔を埋めていた。

再び硬直。意識が遠退きそうになる。自慢できる話ではないが、この年になるにも関わらず、ヒューイにとってその手の話は、別次元の存在と言つていいほど縁遠いものなのだ。

「え、ええっと、ちょっ?　君　」

何故、女の子に突然抱きつかれているのか。何でこの子は俺の胸

に顔を埋めているのか。

自体が飲み込めず、両手を挙げ白旗を振るヒューイはとつさにルベリエとカルダを見た。

「お前、その子のこと気にしてただろ。だからちよつとルベリエに頼んで、連れて来てもらつたんだ」

「助けてくれたあんたが怪我して寝込んでる、なんて言つたらすごい心配してたんだから」

身体に細い腕を回している少女は、よほどヒューイの事を気にかけていたのか、腕の力を緩める気配がなかった。

そんな少女に、ルベリエは苦笑を漏らす。

「リセリア。ヒューイが困つてるから」

「あ、はい」

控えめな返事をし、リセリアと呼ばれた少女は名残惜しそうにヒューイから身を離す。

「ごめんなさい。本当に、会えて嬉しくて……」

少し照れたように頬を染めるリセリア。その小さな仕草さえも、目を奪う。あの嵐の中で、光を放っていると感じたが、その印象は日の下でも変わらなかった。

背筋を伸ばし、リセリアは後ろで手を組みヒューイを見上げる。

「改めまして、リセリアです。助けてくれてありがとうございます」

嬉しそうに細められた瞳は、空のように澄んでいた。

* * *

整えられたカルダの執務室に、紅茶の香気が漂う。まだカルダとヒューイの間で仕事の話が残っている、と知つたルベリエが淹れてくれた紅茶だった。

「もう、カルダがさつさと話を済ませないからよ。手早く終わらせてよ」

「すみません、ごめんなさい」

淹れてくれたルベリエは、平謝りするカルダにぶつくさと文句を漏らしながら、リセリアと共にバルコニーへ出て行く。

当初の予定では、ヒューイへの説教が終わる頃に丁度リセリアを連れて来てもらうつもりでルベリエに時間を指定していたらしい。

意気消沈のカルダはヒューイの向かいのソファに腰を下ろし、深々と溜息を吐いた。そんな彼を見て、ヒューイは「ざまあみろ」と心中で罵る。

バルコニーのガラス戸が完全に閉じられるのを確認し、ヒューイは口を開いた。そう、ここからが、本題だった。リセリアを部屋の外に出して話さなければいけない事。

「身元確認、取れなかったか」

「ああ」

驚き一つ見せず状況の確認をするヒューイに対し、カルダはカチヤリ、とカップの中の紅茶に口をつけながら平静に応じた。

ヒューイが負傷しながらも、リセリアと共に基地まで帰還したのは、四日も前の事である。

ヒューイの怪我は、そう酷いものではなかった。しかし、あの雨の中での飛行でずぶ濡れになったヒューイはその後高熱を出し、三日間も寝込むという羽目にあつたのだ。体調が戻つたのは今朝方の事で、それまでは基地の一角にある自室に缶詰状態だったのである。カルダもカルダでその時の報告や、ヒューイが勝手に連れて来たリセリアの処遇の対応に追われていたらしく、二人揃って落ち着いて話す機会が得られず今に至る。

「近隣の村はおるか、メテオールの戸籍データに照合しても該当しなかったからな。それでお前に詳しいことを聞こうと思ったんだ」

通常、軍が何らかの事情で一般人を保護した場合は、一時的に軍でその身柄を預かるが身元の確認が取れ次第しかるべき処置を取る。メテオール帝国民であれば、その身元照合は一日二日程度で終わる。しかし、リセリアは三日経った現在でも軍に身柄を保護されている。つまり、身元確認が取れなかったということだ。

故に、カルダはこうしてヒューイを呼び出したのだろつ。

「今のところ、上にはあの子を拾った状況とか、簡単なことしか報告できてないからな」

「……何？ 上が報告しろって言ってきたわけ？」

一見すればただの少女にしか見えないリセリアに対して、軍上層部が必要に情報を求めてくるのも不思議だった。

「見つかった場所が場所だしな。それに、あの髪の色。貴重な『外』の人間じゃないのかっていうことだ」

「そつ……！ ……外って、おい。前に見つかったのいつの話だよ」突拍子もないその推測に、ヒューイは思わず今まさに口に付けようとしていた紅茶を噴出しそうになる。しかしすぐさま落ち着きを取り戻し、改めて紅茶を啜った。ミルクも砂糖もないストレートティーの程よい渋みが舌の上に広がる。

このレーレヘイト大陸は、閉鎖された地だ。

大陸周囲の海は、岩礁輪と呼ばれる円環状の岩礁地帯にぐるりと囲まれており、いかなる船もその海域を通り抜けることは出来ない。随分と昔には岩礁輪を抜けての大陸脱出を試みた者もいたらしいが、過去に成功例はない。今でもその海域には、座礁した数々の船の残骸が散らばっている有様だ。

そこでこの大陸の人々は、空に大陸外への脱出手段がないものかと模索し始めた。そうして航空機が生まれ、ようやく大陸の外を見ることが出来る。そう思われた。

だが無情にも、天は人々を見放した。

環気流 強い上昇気流と下降気流が複雑入り乱れながら岩礁輪上空を取り囲む、不可思議な乱気流が存在していたのだ。それに阻まれ、今日までに大陸外への飛行を成功させたものは一人としていない。

近年、飛行技術の向上が著しく、飛行機が環気流を打ち破るのは時間の問題だともされている。それでも、それがいつになるのかは見当も付いていない。

陸海空路共に、大陸外へ出る手立てがないこの地を、人は《鳥籠の地》と呼んでいた。この大陸はまるで人を閉じ込める大きな鳥籠。飛行機乗り鳥は大陸外籠の外を目指し、今この時もあがき続けている。

しかし、閉鎖された地とはいっても、鳥籠の外からの交流がゼロなわけではない。岩礁輪より外の海で漂流し、この大陸に流れ着いた者が極稀にいる。

『外』との交流が断絶されているこの大陸では、『外』から来た人間は、大陸外の様子を知るための貴重な情報源だった。《鳥籠の地》を脱出する方法や、飛行技術の飛躍的向上を望めるものもあるかもしれないと、帝国は『外』の情報は喉から手が出るほどに欲しがっている。

「俺に聞いてくるってことは、もうリセリアからは色々聞いたんだろ？」

「聞いたつていえるほど、聞けたわけではないけどな」

ヒューイは、カルダが上に報告したものと同様の報告書のページを捲る。そこにはあどけない顔を映したりセリアの写真と、彼女の簡易プロフィールが記されていた。だが出身地は書かれておらず、名前も『リセリア』とだけでファミリーネームも何もない。読み進めると、その他にも、いくつかの備考が報告されているが、その量は圧倒的に少ない。たった数枚の報告書はあつという間に読み終わった。

「これだけ？」

「これだけ。だから拾ってきた当人に、当時の状況を詳しく聞かせて欲しいんだよ」

「と、いつても……なあ……」

うーん、とヒューイは唸り、手元の報告書をローテーブルの上に放り投げる。

リセリアについてヒューイが報告できることは、ゼロに等しかった。何せリセリアとともに会話したのは先ほどのが初めてである

し、当時の状況について言えることは、既にカルダも全て知っているのだ。

前線での発見。負傷していたこと。敵機との遭遇。それらはリセリアとヒューイ機の状態を見れば、一目で分かることだ。

思索。だが、いくら当時の様子を思い返してみても、取り立てて何も出てこなかった。

「もしかしたら、なんだが」

報告書を纏めて端に寄せ、ちらりと、カルダはバルコニーにいるリセリアを伺う。

「……ナディア王国軍関係者って可能性はないのか？」

潜められた声に、ヒューイは知らず意識を研ぎ澄ました。

おそらく、これがカルダ個人として最も聞いておきたかったことなのだろう。そのために、都合が悪くなったりセリアを外に出した。レーレヘイト大陸は、下弦の三日月のような形をしている。丁度、月の影となっている部分が大陸東部から中央にかけて侵食している内海に相当している。三日月型の陸の真ん中にはツスタンド山脈が聳え立ち、北と南に地域を分断している。その南側がヒューイ達の国・メテオール帝国、そして北側を支配するのがナディア王国だ。十八年前に開戦があつて以来、両国は敵対関係にあつた。十六年前には休戦協定が結ばれたものの、その協定も二年前に破られている。

途中、戦争の起こっていなかった十四年間も含め、両国は互いの内情を探るために相手国に密偵や暗殺者を忍びこませていた。それは、現在でも変わっていない。帝国側も当たり前のようにやっているし、逆に皇国の者に侵入されたことも多々ある。

リセリアがそういう手の者じゃないのか。そう言わんとしているカルダの意見に、ヒューイはとっさに首を横に振っていた。

「まさか。スパイだっていうのに、あんな目立つ子送り込んできてどうするんだよ。それに、そうだとしたらなんであんな危ない場所に放っておくんだよ。たまたま俺が通りかかったから彼女はこっ

ちの国に来てるけど、あんな場所だったらメテオール軍が見つかる可能性極低だぞ？」

「逆に言えば、スパイはありえないだろ、と思い込ませるのを奴らが狙ってるって事も考えられるけどな」

鋭い切り返しに、ヒューイは渋面になる。

慎重に物事を考えるのは良いことであるし、分からない話でもない。リセリアが何者か分からない今、カルダも不安要素はなるべく取り除いておきたいのだろうが、少々カルダの考えすぎじゃないか、と思う節もあった。

「俺的には、全然そんな感じしないんだけどなあ」

「俺も同意見」

至極当然に頷くカルダに、ヒューイは眉根を寄せた。

「自分であれこれ言っておいて、それ？」

「あれは客観的に見た意見。まあなんだ……見てりや分かる」

疲れたように空笑いを漏らすカルダに、ヒューイはますます首を傾げる。

そんなヒューイを無視して、カルダは立ち上がった。仕事の話はこれにて終了。退室してもらっていたルベリエ達を呼びに行くのだろう。ヒューイもカルダに続いて立ち上がる。

「とりあえず上への報告は後にしておくとして。ま、ひとまずはしばらく監視を続けるか」

「ん？ 監視？」

「当たり前だろ。一応、敵か味方が分からないんだから。今のところ、ルベリエがリセリアの傍に付いているだろ？」

だからルベリエがリセリアを連れてきたのか、と一人納得して、ヒューイも席を立つ。

ふとバルコニーを見れば、その向こうで訓練用の戦闘機が離陸している様子が見えた。戦闘機、というより飛行機が珍しいのか、リセリアは手摺りにぐっと身を寄せて、飛び立つ機械の鳥を食い入るように見ている。かと思いきや、隣のルベリエに向けて満面の笑み

を浮かべる。その笑顔を見ているだけで、楽しそうな笑い声が聞こえてきそうだった。

しかし、カルダの足はそんな彼女たちの元に向かってはいなかった。何故かカルダは、自分の執務机へ。その一番上の引き出しを開けている。

「あーそうそう、ヒューイ。お前に新しい命令があつたんだっけ」顔を伏せているため、彼の表情を伺う事は出来ない。だが、その切り出し方と口調からして、カルダが絶対に笑みをこらえていることが分かった。長年の付き合いささま。

嫌な汗が背筋を伝う。

引き出しから取り出した、一枚の薄い紙。それをヒューイに差し出し、カルダは軍人らしい引き締められた声で言った。

「メテオール帝国軍カルダ・ダグラス少佐の名において、ヒューイ・ノルグス少尉を、少女リセリアの監視役兼世話係りに任命する」

「はいはい監視役……」

なんだ、女の子一人監視するなんて、どうってことな　くない。監視役兼、なんて言った？

「世話係」

心の声をつい声に出してしまっていたのか、カルダがずっと薄っぺらな紙　指令書突きつけてくる。

「監視役だけならまだしも、なんで世話係も入るんだ！」

思わず声を荒げたヒューイに、カルダはあくまでも淡々としていた。

「しばらくは基地の中で様子を見るが、あの子が基地の生活設備を勝手に使えるわけないだろ？」

「いや、それは……」

分かるが、男の自分に年頃の女の子の面倒が見れるわけないだろ、とヒューイは頭を抑える。

「第一監視役なら今ルベリエが任に付いてるんだろ？」

「ルベリエがリセリアに付いているのは、基地の女手が足りないか

らであって、彼女だって通信士としての通常業務がある」

「それは俺も同じだ」

遊撃隊は、いつ出撃が下されるか分からない。飛行訓練や機体のチェックを行った上で、いつでも出て行ける態勢でいなければいけないのだ。

きつい視線で見据えてくるヒューイに、カルダは難しい顔になる。

「しばらくは、第三遊撃隊に出撃命令は下りない」

その確信を持った言い方に、ヒューイは怪訝にカルダを見た。

「ナディア軍が、中央から西にかけての前線戦力を撤退させているらしい」

「撤退？」

「完全撤退というわけではないらしいが、ナディアの王都に戦力を集中させているらしい。何故そんな行動に出ているかは探り中。けど、今のところ仕掛けてくる気配はない」

前線の中央から西というのは、おおよそスタンダード山脈が国境線となっている地域。ヒューイたちが前線に駆り出される地域だ。

そこでの戦闘が起らないとなると、確かに余裕は出てくるかもしれない。

だがしかし、リセリアに四六時中付いていなければいけないというのも、さすがに困る。

未だ納得できない様子のヒューイの心情を見破って、カルダは軽く笑む。

「安心しろよ。ルベリエにも監視役は続けてもらう。日中はヒューイが担当、夜はルベリエでことで交代制にする」

「あ、ああ。よ、よかった……」

「監視っていつでもお前はリセリアを連れていつも通りにしていい。通信官のルベリエと違って一緒にいても機密情報が漏れる事はないだろうからな」

「そうだな。そうしてくれるとありがたい。それなら俺も飛行訓練に出れるし」

訓練の時は、リセリアを近くの誰かにでも預けておけば問題ないだろう。

胸をなでおろすヒューイに、ホント飛ぶことしか頭がないんだな、と苦笑混じりに呆れて、今度こそカルダはバルコニーに向かった。

「ま、大変だとは思うが、独断行動の報いだと思って、頑張れ」

「……何が？」

力のこめられた「頑張れ」の一言に、ヒューイは眉根を寄せて背を向けたカルダを見た。

違和感と同時に覚える、嫌な予感。

「仮にリセリアがあっちの人間だったとして」

そう呟くカルダ。しかし、その後に続く言葉はなかなか出てこなかった。ヒューイが続きを待っている内に、バルコニーから不満顔のルベリエときょとんとしているリセリアが戻ってくる。

そんなリセリアにも聞こえるように、カルダは一言。

「《空帝》ほど目立つ存在はいないだろ？」

せいぜい目立って囂役になってくれ。振り向いたカルダの爽やかな笑みがそう告げているような気がした。

……この野郎。端から人を利用する気かよ。

* * *

通信室や会議室など、基地の中枢機能が集まる中央棟。その一角の廊下では、軍事基地では珍しいかわいらしい声が響いていた。

「本当？　じゃあこれからはヒューイと一緒にいてくれるの？」

リセリアの鈴を転がしたような声が、前を歩くヒューイの背に投げかけられる。しかし、ヒューイが応えるよりも早く、リセリアの隣に並んで歩くルベリエが「そうよ」と短く応えて、しつとりと微笑む。それを聞いたリセリアの顔に、笑顔の花が綻んだ。

リセリアとルベリエを連れてカルダの執務室を後にしたヒューイは、ひとまずリセリアに、これからは自分が行動を共にするという

ことを伝えた。今はルベリエも一緒にいるが、もうしばらくしたら通常業務に戻らないといけないためだ。

「俺は昼間だけ。夜は今まで通りルベリエと一緒にいてもらってよ」「夜はさすがに一緒にいさせられないからねー」

と、ルベリエが背後から釘を刺してくる。背中に感じる視線が、まさしく釘が打ち込まれているように感じる。

「私が一緒じゃなくても大丈夫？」

「うん、平気」

そう優しく問い掛けるルベリエとリセリアは、仲の良い親子か姉妹に見えた。二人とも瞳の色系統が同じ事と、ルベリエの髪がこの大陸の者にしては色素が薄く光加減によって淡い黄金色に見えるせいもあるだろう。

「それと俺、いつも通り仕事場回ったりするけど、リセリアは気にしない？」

「仕事場？」

首を傾げるリセリアの肩から、さらり、と金系の髪が流れる。

カルダには業務は通常通り行つて良いといわれているが、これだけはリセリア本人にちゃんと聞いておかねばならない。監視対象とはいえ、リセリアは年頃の女の子だ。むやみやたらに油臭い機体整備工場や騒音の発生する飛行場に連れて行つて、不快な思いをさせるわけにはいかないだろう。

しかしヒューイの予想とは裏腹に、それを伝えたリセリアは柔らかな笑顔を返してきた。

「大丈夫、ヒューイ。ヒューイと一緒にいれるだけで嬉しい」

リセリアは少し照れたように口元に合わせた手を当てて、ヒューイを見上げてくる。その仕草は可憐だったが、どこか幼く見える。

ふと、先程の報告書に書かれていたリセリアの年齢を思い出し、ルベリエを手招き。耳打ちする。

「……リセリアって本当に十六歳？」

「って、私は本人から聞いたわよ。てか、あんたあの子にいったい

何したのよ。なんで会ったばかりのあんたにあんなに懐いてるのよ」
「な、何もしてないっての！」

半眼で顔を近づけながら追及してくるルベリエに、思わず声が大きくなる。

確かに、この四日間一緒にいるルベリエと違い、ヒューイはまだリセリアと数えるほどしか言葉を交わしていない。執務室で顔を合わせた時も違和感を覚えたが、いくらヒューイが助けたとはいえ、見ず知らずの男に対する態度としてはいささか親密過ぎる気がする。慌てて後ろを振り向くと、二人の会話は聞こえてなかったのか、リセリアはきょとし、それからまたニコニコしてヒューイを見る。

カルダの言っていた、「見てりや分かる」の言葉を理解。こんな無垢な笑顔を見せられて、誰がりセリアは敵だと考えられるだろうか。それだけではない。軍人云々という以前に、リセリアの一挙一動はあまりにも幼く、拙いのだ。

油断しないに越したことはないが リセリアを見ていると、彼女が一体なんだと考えるのが馬鹿らしくなりそうだった。

やがて中央棟の正面出口に辿り着く。表はやはり人が多く、リセリアに好奇の視線が浴びせられる。本人は気付いてないのか、軽い足取りでヒューイの後を付いて来る。

中央棟を出てしばらく歩くと、基地の端に黒く錆びた倉庫が幾つも立ち並んでいるのが見える。戦闘機の整備工場と格納庫だ。リセリアを助けた時に少し被弾していたため、機体の様子が気になって仕方がなかった。

歩調の早まるヒューイの足。その後ろで、ルベリエが足を止める。
「それじゃ、私はここまでで。仕事に戻るわね」

「つと、そろそろ時間か。たまには格納庫に寄ってけば？」

「……遠慮しとく。気分じゃないから」

顔に影を落としたルベリエを見て、ヒューイは小さく「そっか」とだけ応えた。

ルベリエは身を翻すと、颯爽と中央棟に戻っていく。

「リセリアのこと、頼んだわよー。夕飯終わったらその子の部屋に連れて行ってねー」

振り返ることなく、ひらひらと手を振ってくるルベリエに了解と言い、ヒューイは扉が開けっ放しになっている格納庫に入った。途端鼻を突く、機械油独特の臭い。

気になってリセリアを見ると、彼女は嫌な顔一つしていなかった。それどころか、こういった場所が初めてなのか、忙しく辺りを見回している。

「フェリオット、いるかー？」

何かと懇意にしている整備士を呼ぶ。声はさほど大きくなかったのだが、倉庫内に反響してやけに大きく聞こえた。しかし、いつもここにいるはずの彼からは返事がない。

「リセリア、こっち」

仕方なく、ヒューイは愛機を探す。リセリアは、親を追う小動物のようにヒューイの後を付いて来た。

愛機は直ぐに見つかった。同じくして、首を回した方向にフェリオットの姿を見つける。黒く煤汚れたつなぎに、ぼろぼろの軍手。細身だが、たくましさを感じさせる後ろ姿だった。

機体情報が書かれている紙面をにらめっこしては、その周りの二、三人のパイロットとなにやら話し合いをしているようだった。どうやら先客らしい。

しばらく待つしかないか、と小さく嘆息する。この機体はヒューイ用になっているため、フェリオットに専門で整備を頼んでいるのだ。

と、機体を見ていたリセリアがヒューイを向く。

「これがヒューイの飛行機？」

「え……ああ、そう。最近はずっとこれしか乗ってないなあ」

相棒を労わるように、ヒューイはそつと胴体を撫でた。

帝国最新鋭のノーティスN2B 通称『ホーク』。その機体は、

軍服にも使われている、国色のゼニス・ブルーに染められ、単翼タイプの主翼と尾翼には、白と赤のラインが一本ずつ入っている。

メテオール軍では、通常、操縦士一人ずつに常に乗る機体を決める。愛機というものは存在しない。その時に応じて、状態の良い機体を優先的に戦場に出している。しかし、機体一つ一つにも継続的な調子や癖は存在する。そのため、可能な限りは同じ機体に乗りに続けるのだ。

この機体に乗り続けてもう随分になる。もはや愛機と呼んでも差し支えはなかった。

「ナディア軍より、ちょっとだけ速度は落ちるけど、その分風に乗れる。リセリア助けた時も、これじゃなかったら敵機に追いつかれたかもな」

「そっかぁ……」

眩しそうに青色の機体を見つめるリセリア。こっぴどと機体に額をくつつけ、静かに瞼を下ろす。長い睫が、繊細な影を落とした。

「この翼で私のところまで来てくれたんだね。ありがとう」

水々しい桜色の唇が、慈母のように囁く。その横顔に、ヒューイの心臓が不整脈を打つ。

「リセリア……」

「ごめんごめんヒューイ。説明に手間取っちゃってさ」

その瞬間、空気の読めないのんきな声がヒューイの意識を一気に現実に戻した。この、我が道を行くマイペースな口調は間違いない。フェリオットだった。

「どうしたの、ヒューイ。そんな恨みがましい視線向けて」

「別に……」

歩いてくるフェリオットに、ぶっきらぼうに返す。別にリセリアに何かしようとしていたわけではないが、あの神々しささえ感じた少女の顔をもう少し見ていたかった気がする。

「そう？ あ、その子が、ヒューイが保護したって子？」

基地内の者には身元不明の少女を保護、としか伝えていないため、

ヒューイやカルダが最初に抱いたリセリアに対する警戒心というもの、フェリオットにはなかった。

話の矛先を向けられ、リセリアが不思議そうな顔をする。

「はじめまして。僕はフェリオット・イーグルクロウ。ここで飛行機の整備をしています。よろしく」

「リセリアです。よろしくお願いします」

名乗り返したリセリアに、フェリオットは右手を差し出そうとして手が汚れていることに気付き苦笑した。一瞬目を丸くしたりセリアも、彼の苦笑の意に気付き笑みを零す。

「早速なんだけど、機体はどう？ 被弾はそんなに酷くないと思うんだけど」

その一言にフェリオットは、そうだ、と思い出したように呟いた。クリップボードに留められた紙を数枚捲り、フォーゲルの整備資料を取り出す。

「被弾自体は、大した事なかったよ。右のフラップとエルロンが傷ついていたので、そこは取り替えたけどね。胴体に当たった弾も数発だし、飛行に支障が出るような損傷もなかったね」

「そっか。問題なさそうでよかった」

機体に大きな損傷はなかったこと。加えてフェリオットの至って平静な表情に、ヒューイは内心胸を撫で下ろした。飛行機に関して知識も技術も人一倍抜きん出ているフェリオットなのだが、その分、手に掛けた機体への愛着も操縦士のヒューイ以上に持ち合わせている。機体を傷つけて帰ってくる度に、雷雨が吹き荒れるのだ。それはもう、カルダ以上に。

フォーゲルはヒューイ専用の機体に変わりはないのだが、フェリオットからしてみれば手塩に掛けた子供を預けているような感覚なのだろう。だが、

（被弾、自体は？）

妙に強調されていたフェリオットの言葉に、ヒューイは気付く。その思考を呼んだかのように、汚れきった見た目には似合わない爽

やかな笑顔を見せるフェリオット。ヒューイは反射的に回れ右をしようにしたが、それよりもフェリオットが詰問するほうが早かった。「ヒューイ。機体は大事に扱って、前にも何回か言ったよね」

「大事に、扱ってます、よ？」

いつの間にか口調が敬語に変わる。

「その割には降着装置が随分痛んでただけだなー。石でも回転に巻き込んだのか、プロペラのブレードも欠けてたし」

「こ、心当たりがないなあ」

明後日の方向を見るヒューイに、フェリオットは手元の資料をずっと突きつけてくる。見ろ、ということらしい。仕方無しに受け取ると、今フェリオットが言い連ねた事一つ一つが、こと細かに記載してあった。技師としてのフェリオットの腕は確かなので、これらは紛れもない事実なのだろう。

言葉を失くすヒューイ。言い逃れは出来そうになかった。

「無理な着陸とか、したでしょ」

「黙秘権を行使します」

「したでしょ」

「……すみませんごめんなさいちょっと無理しました！」

なおも三白眼気味の視線を強めてくるフェリオットに、ヒューイはとうとう折れ、諸手を上げてリセリアを救出した時に無理な場所に停めた状況を説明した。

すると意外なことに、その話を聞いたフェリオットの反応は穏やかなものだった。

「まあ、その子を助けるためだったっていうなら、許してあげないこともないけど……リセリア？」

リセリアに視線を向けたフェリオットの眉間に、怪訝そうに皺が寄る。ヒューイも振り向き、目を見張った。

口元に手を当てて、俯くリセリア。覗きこんだ顔は、傍目にも分かるほど血の気が引いて青白くなっていた。

「リセリア、どうした？ 気分でも悪いのか？」

「うつん、大丈夫。ちょっとここの空気が苦しいだけ……」

「だけ、じゃないだろ」

「ここ、空気悪いからねえ」

倉庫内の空気は埃っぽい上に、その埃の粒子一つ一つに油や機械の臭いが染み付いている。苦手な人なら吐き気を催しかねない臭いだ。ヒューイは既にこの空気には慣れているが、それでも時折、いつもこんな場所にいるフェリオットがよく体調を崩さないと思うほどだ。こういった場所が初めてのリセリアにとって長居は辛かったのかもしれない。

とりあえず、倉庫外で新鮮な空気を吸わせるべきだ。ヒューイはリセリアの背をそつと押して歩き出す。

「悪い。あとの整備、適当にやっとしてくれ」

「ん？ ヒューイ、いつもあれこれ文句つけてくるのに、いいわけ？」

「今はリセリアの方が優先」

それにヒューイがあれこれ言わずとも、フェリオットはヒューイの飛び方や操縦の癖をよく知っている。それでもいつも意見が衝突するのは、ヒューイの要求に対してフェリオットがあれこれ試したいと好奇心を出すためだった。だがフェリオットの調整した機体が、飛び辛いわけではないのだ。

「了解、少尉殿。と、ヒューイ。これ直ってるよ」

去り際のヒューイに向かって、フェリオットが何かを投げる。それを、半身を振り返った状態でキャッチ。それは軍のパイロットに一般的に支給されているゴーグルだった。入隊してから三年間、一度も大破せずに使っている愛着ある品だ。四日前に怪我を負った際に、ゴーグルを額の上に上げていたため右目のレンズに罅が入っており、修理に回しておいて欲しいとフェリオットに頼んでいたのだ。ゴーグルを額の上に乗せる。定位置。やはりこれがあったほうが落ち着く。「サンキュ」と小さく感謝の言葉を投げ返し、ヒューイはリセリアを連れて倉庫入口へ向かった。

「ごめんなさい……」

目の端にうつすらと涙を浮かべて謝るリセリアの頭を、ぽんぽんと軽く叩く。その時、

「聞いた？ 理由もなく独断行動取った上に、『外』の女の子連れで来たんだって？」

どこからか、そんな軽薄な言葉が聞こえてきた。

ヒューイは首は動かすことなく、目だけで声の方向を見る。少し遠い、若干機体の陰に隠れるような位置に、先ほどフェリオットに何かの説明を受けていた、数人の操縦士達がいた。よく見ると、別の隊の者だが何度か任務を共にしたことがある顔ぶれだった。皆揃って、ヒューイとリセリアに好奇の あるいは蔑むような視線を向けていた。

（まだいたのか。暇な奴らだな）

「ほら、あの子だろ」

ヒューイに聞こえてないと思っていいのか、それともわざと聞こえるように言っているのか、操縦士たちの声は内輪話にしては大きい。おそらく、後者だろうが。

よくある種類の話だった。ヒューイは関係ない、と割り切ってそのまま外に出ようとする。だが、

「もう仕事復帰だろ？ あれで謹慎も刑罰も一切なしっていうんだろ」

「さすが《空帝》。俺らとは扱いが違うよなあ」

その呼び名に、思わず足が止まりそうになった。だが、歩調を乱すことなく歩き続け、外に出る。その間にも、ヒューイの背に投げかけられる言葉と、視線と、嘲笑。

「一般人こんなところに連れてきていいのかよ」

「でも身元不明だって聞いたぜ？ 一般人じゃなくて、案外敵国の人間だったりするんじゃないの？」

「さあ？ 《空帝》がいって言えば、なんでも許されるのかもよ？」

格納庫中に響く、笑い声。

今すぐ踵を返し、駆け出し、全員纏めて殴りたくなる衝動に駆られそうになる。ヒューイは拳を強く握り締め、それを押さえ込んだ。そう。あんな奴ら、軍内にいくらかでも蔓延っている。一々相手にしていたら、きりがないのだ。

「せいぜいお偉いさん方の期待を一身に背負って飛んで貰えばいいさ」

「ヒューイ……？」

異変を察したりセリアが、不安そうな眼差しでヒューイを見上げる。

ぎりつと。噛み締めた奥歯が、小さく歯軋りを立てた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0272ba/>

空色のリセリア

2011年12月31日18時03分発行